

#007 お天気雑記帳

高松城水攻め

岡山市市街地の西、足守川の東岸に、蓮沼と湿田に囲まれた平城の高松城があります。現在は公園として整備され、本丸跡に城主・清水宗治の辞世の句「浮世をば今こそ渡れ^{ものふ}武士の名を高松の苔に残して」を刻んだ石碑が建っています。天正10(1582)年、湿地に足をとられたところを、城の毛利勢から鉄砲で撃たれて攻めあぐねた秀吉勢は、長大な堤を築いてこの城を水攻めにしました。



▲ 高松城址



いろいろな本や資料に「高さ8m、長さ3kmの堤を12日間で築いた」とあります。蛙が鼻築堤跡に大きな看板もありました。本当でしょうか。

国土地理院の土地条件図で確認すると、「旧河道(低地の中で周囲より低い帯状の凹地で、過去の河川流路の跡)」に隣接して高松城があります。国道180号の西にある市道沿いに、「自然堤防(洪水時に運ばれた砂等が、流路沿いに堆積してできた微高地)」が点在し、それらを結ぶようにして、「盛土地・埋立地(低地に土を盛って造成した平坦地や、水部を埋めた平坦地)」が連続しています。この市道は旧街道で、周辺よりも



▲ 土地条件図

一段高くなっていたので、これを堤の代わりに使ったようです。低い所は土を盛ったかもしれませんが、それほど手を入れる必要はなかったのではないのでしょうか。仮に全体を高くするにしても、近くの土を掘って盛り上げる程度の工事ですから、それほど難しくありません。

『絵本太閤記』に、4月下旬に「堤を築かけ(堤を建設し)」、5月中旬に「防堤を漸々に高く築上げける(堤を徐々に高くした)」という記述があります。最初に、蛙が鼻の高松一宮西川の両岸に土を盛り、竹籠の中に川原の石を詰めた竹蛇籠を川に投げ込んで、一気に流れをせき止めて300mの堤を築き、その後、毛利勢の様子や水位を見ながら3kmの堤全体を高くしていったというのが真相のようです。蛙が鼻の300mの堤を築いたのが12日間ならば、不可能ではありません。



▲ 蛙が鼻の航空写真

雨が降ると、土が水を含んで柔らかく重くなり、移動させるのが難しくなります。また、川の流れを止めるのも難しくなります。逆に、雨が降らないと、水が溜まらず、水攻めの効果が出ません。

蛙が鼻の堤の建設に着手した旧暦4月13日から、完成した4月25日までの天気を調べると、梅雨入り前ということもあり、工事日和の晴天が続いています。水位も下がり、流れをせき止めるのも、それほど苦労しなかったのではないのでしょうか。

本能寺の変(天正10年6月2日)の20日前から、一転して雨が降り続く梅雨らしい天気になりました。秀吉が、信長の到着を待って毛利と和睦するシナリオを考えていたとしたら、この雨は想定以上の雨だったに違いありません。水位が上昇すると、信長の到着を待たずに城が落ちてしまいます。水が堤を越えて流れ出し、堤が破損する可能性もあります。秀吉は、信長の到着が遅れるのを心配していたのではないのでしょうか。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 **松嶋 憲昭**